

しっぽ通信

お花見の季節ですね！
ペットと一緒に花を見ながらのお散歩も気持ちがいいものです。
そして春の訪れと共にやってくるのがワンちゃんネコちゃんの様々な予防。どうぞお忘れなく。

犬猫が食べてはいけないもの

近年、ペットの飼育環境がより人と密接になったためか、誤食事故が増えています。

皆さんも日頃から玩具や紐状の物、ビニール袋など、飲み込んでしまっただけではいけない物は、ペットの届くところに放置しないなどの注意はされているとは思いますが、誤食事故の原因になる物には、人では普通に食べる物などもあります。また、そういった物は犬猫にとっても美味しく感じる物だったりするので、欲しがったり、盗み食いしたりしてしまうこともあります。

犬猫にとって危険な物を知り、誤食事故を未然に防ぎましょう。

少量でも中毒を起こす物

□ネギ類(煮汁なども含む)
タマネギ・長ネギ・ニンニク・ニラ・らっきょう など
血液が壊され貧血症状が現れる。

□カフェインやテオブロミンなどの入った食品
チョコレート・カカオ・コーヒー・様々な茶葉・ガラナ・コーラ・栄養ドリンク剤 など

摂取後4～15時間で嘔吐・下痢・興奮・痙攣・動悸・最悪死に至る。

□観葉植物(球根なども含む)
□人の医薬品やサプリメント

犬猫にとって様々な毒性を持った物が多いので自己判断で安易に与えたり、誤食しないように注意。

多量摂取で危険な物

□キシリトール入りのお菓子
ガム・キャンディー・クッキー など
□一部の野菜(キシリトール含有)
プラム・イチゴ・ナス・レタス・カリフラワー・ラズベリー など

多量摂取により摂取1時間前後で嘔吐・下痢・沈うつ・痙攣・低血糖・場合により肝障害を起こす。

□ぶどう・レーズン
摂取後5～6時間で嘔吐、数日後に腎不全・最悪死に至る。

□生の魚介類・甲殻類
長期間、大量摂取により嘔吐・下痢・消化不良・ビタミンB1欠乏症(運動機能障害・麻痺・神経症状などを起こす)。

□レバー(特に猫)
ビタミンA、ビタミンD過剰症になる事がある。
□青魚
食べ過ぎることで、黄色脂肪症という病気になる可能性。

気をつけた方がいい物

□骨(特に鶏の骨)
とがった骨で口腔内や消化管内を傷つける可能性。下痢などの消化不良。

□牛乳
乳糖を分解する酵素が少ないため下痢を起こす可能性。

□生のほうれん草
ほうれん草はシュウ酸を多く含むため、尿結石を形成してしまう可能性。加熱、アク抜きをすれば可。

□ナッツ類
消化が悪く、下痢・嘔吐の可能性。マグネシウムを多く含むため、尿結石の形成の可能性。マカダミアナッツは犬猫において毒性が強い。

□アボカド(葉・種子・樹皮も含む)
嘔吐・下痢などの胃腸炎を起こす。

□生の豚肉
トキソプラズマ(寄生虫)の感染のおそれがある。人にも感染の可能性有り。

□アワビなどの貝類
毛の薄い場所(耳など)に腫れや痒みを伴う光線過敏症を発症する可能性。

□パン生地
発酵による胃の膨張や、イーストが形成するによるアルコール中毒の可能性。

□アルコールを含む飲食物
嘔吐・下痢・意識障害・痙攣などを起こす可能性。

□生卵の白身
白身に含まれるアビジンにより、下痢・皮膚炎・結膜炎などを起こす可能性。加熱で可。

□海産物(のり・鰹節など)
□ミネラルウォーター
マグネシウムなどのミネラルが豊富なため、尿結石を形成する可能性。

□ジャーキー(主食の場合)
主食として毎日多量に食べ続けることで、再生不良性貧血、肝臓・脾臓・腎臓に障害が出る可能性。

□ヒトの食べ物
塩分や糖分が、犬猫にとっては多いため、腎臓疾患、心臓疾患、肝臓疾患、糖尿病、肥満、高コレステロール血症などの病気になる可能性。また、ネギ類などのエキスが含まれている物も多いので要注意。

未だ、犬猫に害があるとは知られていない物もあるかもしれなので、基本的に人の物は与えない。

怖いフィラリア症

フィラリアは蚊に媒介され、犬などの動物の心臓に寄生する寄生虫で、フィラリアが寄生し、心臓などに障害をきたしている状態を「フィラリア症」といいます。

感染のしくみ

フィラリアは動物の体内で幼虫（ミクロフィラリア）を産み、血液に乗って体内を巡っています。ただ、幼虫はこのままでは成虫にはなれません。いったん蚊の体内に入り約2ヶ月かけて感染能力のある状態まで成長します。蚊が吸血する時、幼虫は動物の体内に侵入し、皮下から筋肉などを移動しながら成長し、静脈に入ります。静脈まで達した幼虫は血流に乗り、最終的に心臓（右心室・肺動脈）にとどまり、成虫になります。そこで交尾し、幼虫を産むというサイクルになります。

フィラリア感染～静脈内に幼虫が出現するまで、約7～8ヶ月かかります。

成虫の寿命は約5～6年、幼虫の寿命は約1～2年といわれています。

症状は、成虫の寄生数や、動物の心臓の大きさ、感染期間などによっても様々で、無症状の場合もあれば、重症になってしまう場合もあります。

一般的に、心臓に寄生するため、元気や食欲の低下、咳、疲れやすい、失神、肺水腫、胸水などのいわゆる心臓病の症状が主になりますが、腎臓

や肝臓にも負荷が及ぶ場合もあります。その場合、黄疸や腹水、貧血、赤い尿などの症状があります。また、寄生した虫が血管に詰まり突然死することもあります。

フィラリア症の治療は、手術で寄生した虫を取り除くか、駆虫薬で虫を死滅させるかの方法になります。しかし、どちらの方法も動物に与えるリスクはとても高く、フィラリア駆除のために命を落としかねません。また、障害を受けた心臓などの臓器は、虫がいなくなっても元に戻るわけではないので継続的に治療が必要になります。

予防が肝心

フィラリア症は予防薬で未然に防ぐことのできる病気です。

予防薬は、寄生した幼虫を死滅させるもので、幼虫が心臓に寄生する前までに駆除することが大切になります。

幼虫が動物の体内に入ってから心臓に到達する前の期間は約2ヶ月なので、蚊が出始めてから約1ヶ月頃から蚊がいなくなっている約2ヶ月先頃まで予防薬を毎月欠かさずに投与することで、フィラリア症は防げます。

また、前述したように予防薬は幼虫を死滅させますので、大量に幼虫が寄生していた場合、死んだ虫が血管を詰まらせたりする可能性があるため、フィラリア予防投与開始前には必ず検査を受け、体内に虫がいらないか確認しましょう。

猫にもフィラリア予防？

「フィラリア症」は犬の病気と思われる方も多いのではないのでしょうか。近年の研究により、猫もフィラリア症に感染することが明らかになりました。ただ、猫の場合症状が現れづらく、犬に比べると発見や診断が難しい病気です。

気づいた時には既に深刻な状況になっているので、犬同様、定期的な予防をするのが良いでしょう。

猫のフィラリア予防薬は、ノミ・マダニ予防と同時にできる滴下式の物があります。詳しくはスタッフまでお問い合わせ下さい。

ペット保険 加入していますか？

ペット保険をご存知ですか？

ペットの医療もヒトの医療と変わらないくらい発展し、様々な病気の治療が可能になりました。そして、当たり前ですが、検査や治療にはそれなりの費用がかかります。検査や治療の内容によっては高額な医療費がかかる場合も珍しくありません。

病気で動物病院にかからない一生を終えられれば最高なのですが、生き物ですから、いつ、どんな病気になっても不思議ではありません。万が一の時、医療費の問題でペットに十分な治療を受けさせてあげられない…なんて事にならないよう、ペット保険に入っておいてはいかがでしょうか。

最近では、ペット専門の保険会社だけではなく、ヒトの保険会社でペットの保険を取り扱っているところもあり、保険会社は多数あります。それぞれ保証内容や掛け金などが違いますので、各ご家庭にあった保険を選ぶことをお勧めいたします。

【主なペット保険会社連絡先】

- ★アイペット損害保険
0800-111-1525
- ★アクサダイレクト
0120-997-279
- ★アニコム損害保険
0800-888-8256
- ★イーペット少額短期保険
0120-1212-07
- ★SBIいきいき少額短期保険
0120-74-8164
- ★日本ペットプラス少額短期保険
0120-12-3839
- ★ペッツベスト少額短期保険
0120-744-125
- ★ペット&ファミリー少額短期保険
0120-584-412
- ★ペットメディカルサポート
0120-121-856

インターネットでは各社比較サイトなどもありますので、参考にするのも良いかもしれませんね。